

雪村周継と臨濟宗幻住派

水野裕史

はじめに

- 一、雪村研究の問題点
- 二、景初周随と臨濟宗幻住派
- 三、大蟲宗岑と相鑑斎
おわりに

はじめに

十六世紀の東国に生きた雪村周継の生涯は、謎に満ちている。生誕年や没年は明らかにならなず、同時代の文献史料にもその名が登場しない。その一方で、数多くの作品を残し、その様式に追随したものも多く、刺激を受けた絵師の数は相当数に上る。衛藤駿氏が「個性的大画家」と評するように、「自画像」(大和文華館蔵)(図版一)のような同時代の水墨画と比較しても、奇抜で多様な筆法を駆使した作品が伝存している。⁽²⁾客観的な文字資料の不在にもかかわらず、多くの個性的な作品を残した点が、雪村の魅力であると同時に、最大の謎でもある。このような雪村の謎を解明するべく、多くの人が資料を博捜し、解釈を試みてきた。その意味で言えば、近年、江戸時代後期の偽書であることが認定された『説門弟資云』は、その喧伝に関わった谷

文晁や酒井抱一らが雪村の謎に迫った一つの研究成果と認められるかもしれない。⁽³⁾付け加えれば、雪村の情報は江戸時代初期にもすでに情報が錯綜しており、『丹青若木集』や『本朝画史』にも、雪村の生誕地は、奥州や常陸と異なつて書かれている。このあたりの事情から、江戸時代初期の狩野派も、雪村の伝歴を追跡していたのかもしれない。⁽⁴⁾今日の研究では、福井利吉郎氏、赤澤英二氏、小川知二氏をはじめとする多くの雪村研究者によって、その伝歴が整理され、作品の制作年から制作地まで比定されるとともに、十五世紀末に常陸国佐竹氏の一族として生まれ、八十六歳前後で没したことが確実視されている。

雪村は、伝存する作品と江戸時代の画伝類の記述から、常陸から奥州、小田原、鎌倉、三春などを転々と移動したことに疑いの余地はない。ただし、この遊歴の前後関係が曖昧としている。雪村研究の第一人者であった福井利吉郎氏が、昭和八年(一九三三)に提出された「雪村新論」にて、「此の画家の経歴は研究するに随つて弥々雪舟の時代を離れ、又京畿及び関東の地を遠ざかるに拘らず、却て其の辺陲の地、乱離の時、真に此の画人の生る可き理由を見出し得るのである。之れ第一の問題。」と述べているように、雪村の遊歴の理由については不明な点が多い。⁽⁵⁾この遍歴の背景として、最も合理

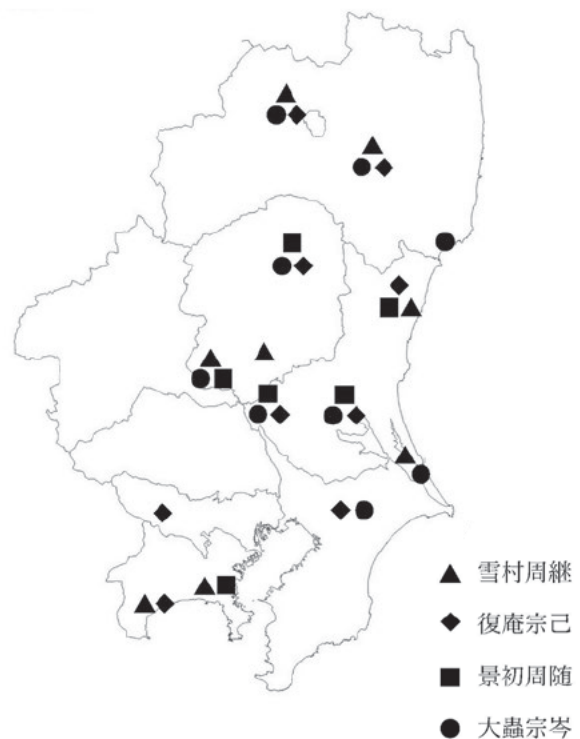
的な解釈として有力視されているのは、十六世紀の関東禅林を席卷した臨済宗幻住派との関係である。⁽⁶⁾ただし、この説も状況証拠に頼るのみで、確証が得られたわけではない。このような現状を踏まえ、山田烈氏は「雪村の生涯と造形の魅力を探るために、点線、補助線ほか何であれ作業仮説としての「線」を描かねばならない。」と提言している。⁽⁷⁾

そこで本稿では、山田氏が強調する「線」にあたる人物として景初周随(?—一五五七)と大蟲宗岑(一五二二—九九)を取り上げたい。この二人は、臨済宗幻住派に関係した禅僧であり、彼らの活動に注目すると、雪村の活動と多くの場所が一致し(挿図1)、これまで指摘されてきた臨済宗幻住派の説を補強できる見込みがある。本稿は、二人の禅僧の史料に着目することで、詳らかではなかった雪村の伝歴研究に一定の解釈を提供する。

一 雪村研究の問題点

まずは、先行研究を整理しつつ、これまでの雪村研究で言及されてきた遍歴の理由と禅僧の交流について確認しておきたい(表1)。なお、雪村の生誕年については、福井利吉郎氏が提唱された永正元年(一五〇四)説と赤澤英二氏による明応元年(一四九二)説、時代に幅を持たせた小川知二氏の延徳年間(一四八九—九二)以降説がある。⁽⁸⁾本稿では、小川氏の見解に従う。また、作品の制作年についても、小川氏による分類に拠った。⁽⁹⁾

常陸国部垂の生まれとされる雪村は、佐竹氏の菩提寺であった現在の常陸太田市の北にある正宗寺で修禪したと考えられる。この正宗寺は、現在、臨済宗円覚寺派の末寺であるが、寺伝によれば、平安時代中期の武将の平良将が律宗寺院の増井寺を創建したことが始まりとされる。⁽¹⁰⁾その後、源義家によって真言宗に替わり、勝楽寺と改称された。弘安年間(一二七八—八八)に



挿図1 雪村と関連禅僧の足跡

は、当地を治めていた佐竹行義が勝楽寺の傍に正法院を建て、子の貞義の時代となると禅宗に替わっていった。貞義の子である義篤は、夢窓疎石に修禪し、のちに剃髪して浄喜と号した。義篤の弟である月山周樞(一二三〇—九九)も、夢窓疎石に学び、夢窓を正法院の開山とし、月山は寺中に正宗庵を起こした。義篤は、所領を寄進するなど厚遇し、庵の名を廢して正宗寺を称するようになったのである。これ以降、正宗寺は、佐竹氏一族から多くの住持を迎え、佐竹氏の菩提寺として発展する。雪村は、永正年間(一五〇四—一二)には正宗寺に入寺したと考えられている。天正年間(一五七三—九二)の常陸国の争乱で勝楽寺と正法院は衰え、江戸時代以降は、正宗寺だけが残った。正宗寺には、雪村が若い頃に描いたとされる「瀧見観音図」が伝存している。⁽¹¹⁾

正宗寺で修禪した雪村は、会津に向かう。常陸から会津に向かった理由と

表1 関連略年表

* 雪村の生誕年については、福井利吉郎氏の永正元年（1504）説、赤澤英二氏の明応元年（1492）説、時代に幅を持たせた小川知二氏の延徳年間（1489-92）以降説がある。本稿では、小川知二氏の見解に従う。

* 小川知二『常陸時代の雪村』（中央公論美術出版、2004年、253-257頁）を参考に略年表を作成した。

* 詳細な年表は、上記の小川知二氏著書、展覧会図録『雪村—奇想の誕生』（東京藝術大学大学美術館、2017年）を参照のこと。

和暦	西暦	雪村事項	関連事項	雪村の主な作品
延徳年間	1489-92	延徳年間以降に雪村生誕		
永正年間	1504-21	この頃、正宗寺に入寺		
永正3年	1506	耕山寺で性安に学び、同寺で団扇絵を描く〔絵画叢誌〕	この頃、雪舟等楊没	「瀧見観音図」 「葛花、竹に蟹図」 「束帯天神図」 「月夜独釣図」
天文5年	1536		景初周随、円覚寺住持を辞す この頃、景初周随、茨城・正宗寺や結城・華蔵寺などを訪問〔忍斎楽水道人口号〕	
天文11年	1542	弟子のために『説門弟資云』を著す〔文晁画談など〕		「夏冬山水図」 「風濤図」
天文12年	1543		会津黒川城、修築完成	
天文14年	1545		佐竹義篤没	
天文15年	1546	この年までに常陸を出発し、会津に向かう 5月、会津で蘆名盛氏に「画軸巻舒法」を授ける〔丹青若木集〕 6月、鹿沼の今宮神社に神馬図を奉納〔画学叢書〕		
天文18年	1549	小田原の早雲寺にて以天宗清に修禪		
天文19年	1550	この年までに、佐野・足利をまわり、小田原・鎌倉を訪問 以天宗清、「以天宗清像」に賛をする		「琴高仙人・群仙図」 「龍虎図屏風」 「以天宗清像」
天文21年	1552		牧松筆「山水図」に景初周随、着賛	
天文22年	1553		景初周随、布袋図に着賛〔忍斎楽水道人口号〕	
天文23年	1554		以天宗清没 7月、甲相駿三国同盟 景初周随、伝祥啓筆「渡唐天神図」に着賛	
天文24年	1555	景初周随、「叭々鳥図」に賛をする		「叭々鳥図」
弘治2年	1556		正宗寺第21世の晨初周随没	
弘治3年	1557	この年までに景初周随賛「燕図」を制作 小田原・鎌倉を離れ、鹿島神宮に「百馬図帖」を奉納し、奥州に向かう	景初周随没	「百馬図帖」
永禄2年	1559	北条氏政が帰依した僧と伝わる〔扶桑名公画譜〕	北条氏政、氏康より家督を譲られる	
永禄3年	1560	この年までに大室宗碩賛「山水図」制作	北条氏政、足利学校に宋版『文選』を寄進 大室宗碩没	「鷹山水図屏風」 「呂洞賓図」 「寒山拾得図」
永禄4年	1561		上杉謙信、関東に出陣	
永禄6年	1563	「倣牧谿瀟湘八景図巻」を進上		「蝦蟇鉄拐図」 「蔬果図」
永禄7年	1564	「倣玉潤瀟湘八景図巻」を進上		
永禄10年	1567		大蟲宗岑、相鑑斎と会津で会う〔大蟲岑和尚語録〕	
永禄11年	1568		3月、鶴浦入道（蘆名盛氏の家臣）の元に武田信玄から「絵一対布袋和尚筆」到来〔戦国遺文武田氏編第2巻〕	
元亀3年	1572	常陸に赴く〔画乗要略〕	京に滞在していた正宗寺23世籌叔顕良に、策彦周良・月航玄津らが餞の詩を賦す。 〔仁如集堯『鏤氷集』など〕	「金山寺図屏風」 「自画像」 「瀟湘八景図屏風」 「孔子觀欵器図」
天正元年	1573	三春に住む〔雪村庵扁額〕		
天正5年	1577	これ以降に没す		

しては、赤澤英二氏は、天文十年（一五四一）の会津黒川城の再建のために招聘されたとする⁽¹²⁾。よく知られているように、狩野一溪『丹青若木集』（慶安から承応年間（一六四八―一五五）頃）には、「會津之城主葦名守氏授畫軸卷舒法、有一軸、此奥書爲天文十五年五月日」とあり、天文十五年（一五四六）には、会津の地に滞在し、会津黒川城主蘆名盛氏に「畫軸卷舒法」を奉進している⁽¹³⁾。

会津には、雪村の足跡が多く残る。文化六年（一八〇九）に完成した『新編会津風土記』巻一七には、蘆名氏の祈願所であった金剛寺の寺宝として、「遊魚図一幅」、「鍾馗像一幅」、「山水屏風一双」が記されている⁽¹⁴⁾。このうち「山水屏風」は、現存する「瀟湘八景図屏風」（金剛寺蔵）と見られている。同じく『新編会津風土記』の興徳寺の項目には、「布袋画 一幅 雪村筆」とある⁽¹⁵⁾。興徳寺は、鎌倉時代の蘆名盛宗が大檀越となった寺院で、渡来僧の鏡堂寛円（一二四四―一三〇六）開山による名刹として知られている。

次に雪村は、会津から小田原と鎌倉へ向かう。この移動の理由については、判然としない。臨済宗夢窓派に属している雪村は、入寺した正宗寺が円覚寺派であったことから、この縁故をたどったものと推測されている。元禄十三年（一七〇〇）成立の浅井不旧『扶桑名公画譜』に「蓋聞北條氏政之歸依僧也」と書かれているように、雪村は小田原や鎌倉に滞在した⁽¹⁶⁾。天文十九年（一五五〇）に、この地で雪村は、以天宗清の頂相「以天宗清像」（京都・龍泉庵蔵）を描いている。以天宗清は、北条早雲の子である氏綱によって箱根湯本に建てられた早雲寺の開山として京から招かれた禅僧であり、幻住派の流れを汲んでいる⁽¹⁷⁾。早雲寺第二世の大室宗碩の着賛による玉澗様の「山水図」（個人蔵）もこの頃に描かれたものと考えられている。

その後、雪村は、常陸に戻り、会津や三春を転々とし、晩年は三春を拠点

に活動する。この間に雪村は、足利学校にも寄つたらしい⁽¹⁸⁾。「孔子觀欒器図」（大和文華館蔵）は、儒教の祖である孔子の事績を主題としたもので、雪村が儒学を講じる学校であった足利学校と何らかの交流があったとしても首肯できる。加えて、近年の研究で、正宗寺は中世関東における儒学研究の拠点となっていたことが明らかとなっている⁽¹⁹⁾。雪村は正宗寺で儒学を修め、それが縁となって本図が描かれたのであろう。

七十六歳以前の作と考えられる雪村筆「渡唐天神図」（茨城県立歴史館蔵）に着賛した策彦周良との関連は、正宗寺の第二十二世である籌淑顕良が関与したと考えられる⁽²⁰⁾。天正二年（一五七四）に籌淑顕良は、弟子の騰叔玄茂とともに京から常陸に帰る際に策彦や月航玄津（？―一五八六）らの餞として賦された詩を持ち帰っている⁽²¹⁾。雪村画における策彦の着賛には、籌淑が関与していたとの先学の指摘は納得できる。なお、小川氏は、常陸の禅源寺や会津の興徳寺などに住持した月航玄津の記録から雪村の足跡をたどる必要性を投げかけているが、現在のところ、月航の史料からは雪村に関する記述を見出すことはできない⁽²²⁾。

雪村遊歴の背景としても、最も説得力を持って解釈されているのは、臨済宗幻住派との縁故である。臨済宗幻住派とは、中国臨済宗の中峰明本（二二六三―一三三三）の法統で、中峰明本が庵居した室名を幻住庵としたことから、幻住派と呼ばれる⁽²³⁾。鎌倉時代末期には日本に伝来し、復庵宗己や大拙祖能等の禅僧が中峰明本に参禅した。鎌倉や京都の官僚的な性格を持つ禅宗（叢林）と比較して、林下に属し、隠遁的な性格を持つ門派であった。博多の聖福寺や丹波の高源寺を拠点に活動し、やがて十六世紀に関東にも勢力を拡大した⁽²⁴⁾。関東圏では、復庵宗己（一二八〇―一三五八）を開山とする大雄山法雲寺（茨城県土浦市）を中心に、室町時代末期の関東圏一円に広まった。

復庵宗己は、弘安三年（一二八〇）に常陸国の小田治久の子として生まれる。⁽²⁵⁾ 延慶三年（一二三〇）に中国に渡り、中峰明本に参禅し、元弘二年（一二三二）に小田宗知の招きによって、高岡（現、土浦市）に揚阜庵（後の法雲寺）を設けた。足利尊氏からの度重なる要請を固辞した。

雪村は、この復庵宗己を私淑し、その足跡をたどったとする見解がバーバラ・フォード氏より提示されている。⁽²⁶⁾ その理由としては、雪村周継「自画像」（大和文華館蔵）の様式や復庵宗己の開山による三春の福聚寺に雪村画が伝わっていることなどである。具体的な根拠として示されている雪村の自画像と幻住派の開祖である中峰明本の頂相「中峰和尚像」（法雲寺蔵）（挿図2）を確認しておきたい。類例が多く残る中峰明本の頂相には、定型が認められ、決まって長い髪と顎髭が描出される。⁽²⁷⁾ 法雲寺所蔵の「中峰和尚像」は、山水が描かれた屏風を背にし、払子を握り、曲泉に座る姿で描かれ、穏やかな表情をしている。縁側には朱色の欄干、外には、奇妙な形の石に篠竹が見受けられる。このような風景描写について、フォード氏は、唐末五代蜀で羅漢画家として知られていた張玄による「十八羅漢図」の第十八「注茶半吒迦尊者」

挿図 2 「中峰和尚像」 茨城・法雲寺蔵

を暗示するものと述べる。⁽²⁸⁾ また、この構図は、一般化していたらしく、相国寺慈照院所蔵の「中峰明本像」にも認められる。⁽²⁹⁾ 雪村筆「自画像」には、雪山と月明かりが照らす情景を背後に、一人の老人が描かれている。この老人は、袈裟をまとい、両手で一尺程度の如意を持ち、鹿の皮を掛けた藤椅子に座している。この「自画像」と法雲寺所蔵の「中峰明本像」の自然景の中に佇立するという共通性から、雪村と臨濟宗幻住派の関係性を解釈することができるのである。

また、幻住派の寺院と雪村を結び付けることも可能である。復庵宗己が開山初祖となった三春の福聚寺には、雪村筆「達磨図」が伝来しており、赤澤英二氏による報告によれば、箱書に「田村公御寄附」とあることから、本図は田村氏伝来品とみられる。⁽³⁰⁾ 会津の実相寺も復庵宗己が勧請開山となった寺院である。実相寺は、元徳年間（一二二九―一二三二）に蘆名氏の重臣であった富田祐義により復庵を講じて創建された。赤澤氏と小川氏によって指摘されていることだが、天文年間（一五三二―一五五）には、下野の雲巖寺（復庵宗己開山）から奇僧として知られた桃林契悟（残夢）が実相寺に来往しており、この残夢と雪村が交流していたことも推測されている。⁽³¹⁾

先述の早雲寺第二世以天宗清も幻住派の流れを汲む。⁽³²⁾ 臨濟宗正統派であった以天宗清の一派が、北条氏の外護を受けて幻住派の流れに加わっている。また、幻住派の禅僧は、足利学校校席主に就くこともあった。伊藤幸司氏が「琉球、博多、京都、関東足利学校を結びつける禅林内の人的関係は、「幻住派」のネットワークと重なる面が多々あり、（略）」と指摘されているように、⁽³³⁾ 足利学校や正宗寺と雪村が活動した場所が「幻住派」というキーワードで結び付くのである。

重要な点は、彼らが宗門の枠を超えて、活動していたことにある。室町時

代後期の夢窓派を含む五山諸派の人は、五山派に属しながらも、幻住派から「印證」を受けたと称して、幻住派の人としても行動していた。⁽³⁴⁾ 雪村周継の「周」字は、夢窓派の系字であり、雪村自身は夢窓派に属していたことは間違いないが、幻住派としても活動した可能性もあり得る。なお、復庵とならんで幻住派を日本に持ち込んだ大拙祖能（一三三―七七）は、正宗寺の近くにある弘願寺の開山初祖で、常陸時代の雪村が幻住派と接触していたとも考えられる。幻住派を含む林下の禅僧たちは、雲水や雲衲として各地にいる「知識」に会うことを求めて、遍歴するという特徴を持っている。⁽³⁵⁾ 雪村は、このような幻住派の生き方に倣い、諸国を回ったのではないだろうか。この仮説に基づき、次に関東の幻住派の拠点であった大雄山法雲寺所蔵の史料を起点に、雪村と幻住派の関わりについて考えてみたい。

二 景初周随と臨濟宗幻住派

まず、法雲寺所蔵の史料から、雪村に関係すると思われる史料を紹介する。享保七年（一七二二）春に編纂された『法雲雜記便覧』（法雲寺蔵）⁽³⁶⁾である。この史料は卷末に「享保七年壬寅仲春」とあり、享保七年春に法雲寺第二十世獅林億が、法雲寺の資料の散逸を恐れて、編纂したものと書かれている。その中に、円覚寺に住持した「忍済洛水道人」と号する景初周随が、法雲寺塔頭であった宝篋山永興院跡で、小田朝久（一四一七―一五五）が建立した永興院の跡のみが残っていることを偲び、漢詩を詠んだとある。

〔史料一〕

小田宝篋山永興院

小田讚岐守持家嫡中務太輔朝久亨徳四年乙亥閏四月二十四日三十九歳而

卒号永興院開雲道昌於郭内為建梵刹弘治（天正）年中檀君没落之後敗壞畢令引当山之境内終存其跡矣前円覚忍済洛水道人景初周随投宿於小田永興有看華馬之詩

曰

芳辰豈可用膏車、嘶自朝霞至暮霞、

緩輿意向春誓、若非馬上不看華、

又

攬轡不兼徒步同、春風得意玉華聰、

一遊欲統拾遺句、著策錦宦城暁紅、

又

相并养景与良辰、全勤著花宦陌塵、

霞外嘶殘紅叱揆、吟鞍一刻豈無春、

又 赴小田馬上看筑波

筑波名自壯年聰、今日看之塵眼醒、

雲霧不埋為我否、吹晴山様与天青、

景初周随の法雲寺の逗留時期は、天文年間（一五三一―一五五）の頃と考えられる。史料には、弘治（一五五―一五七）と書かれているが、朱書で天正と訂正されている。ただ、天正年間（一五七三―一九二）は景初周随の没後（一五五七年）であるため、天文年間の誤記であろう。⁽³⁷⁾

景初周随は、円覚寺第一五二世の禅僧で、臨濟宗夢窓派に属している。景初は、二点の雪村画に着賛している。天文二十四年（一五五五）の年記を伴う「吠々鳥図」（国・文化庁保管）（挿図3）と「蕪図」（禅文化研究所蔵）（挿図4）である。雪村と景初との関わりは、これまでも度々推測されてきた。その根

挿図 3 雪村周継筆「叭々鳥図」 国（文化庁保管）

挿図 4 雪村周継筆「蕪図」 禪文化研究所蔵

扱は、二つの着賛および正宗寺が臨濟宗円覚寺派に属していたことによる。しかし、それ以上の情報はこれまで指摘されることはなかった。従来の雪村研究では、円覚寺住持であった景初着賛の二つの作品があることから、雪村が鎌倉に向かい、鎌倉の地で着賛されたものとされてきた。しかし、山田氏が、「絵画は文字通り「動産」であり、かつ制作者と作品が常に一緒に動くものとは限らない。」と指摘するように、絵画と場所を結び付けることには躊躇せざるを得ない。⁽³⁸⁾そのため、「叭々鳥図」と「蕪図」を鎌倉の地と直接結び付けることは難しい。では、雪村は、景初周随と、いつどこで交流したのであるうか。結論から言えば、雪村が若年の時に正宗寺において交わった蓋然性が高い。次に、そのことを裏付ける史料を提示し、考察したい。史料は、『法雲雜記便覧』に書かれた「忍洛洛水道人」という道号から探し出すことができる。それ

が、東京・石川武美記念図書館「成實堂文庫」に所蔵される『忍齋樂水道人口号』である。

この史料は、現在確認できる景初周隨の唯一の語録である。室町時代末期の漢籍で、表紙に円覚寺一五八世の雲如梵意が書写したものとあり、「忍齋樂水道人口号」と黒書きされている。⁽³⁹⁾ 縦二五・九×横一九・四cm、全一二四丁、一丁目の冒頭には、「忍齋樂水道人口号」と書かれている(挿図5)。徳富蘇峰の旧蔵品。執筆者の雲如梵意は、円覚寺第一五八世で、仏日庵の鶴隱周音につき、夢窓派方外宏遠下の人。策彦周良の法嗣である三伯玄伊(夢窓派)の印可を受けて、帰源庵に入住し、幻住派を同庵の法系に導入したことで知られる。⁽⁴⁰⁾ なお、この三伯は、策彦周良の法嗣である三章令彰(夢窓派に属するが、幻住派の印可を受けている)につき、幻住派の師資の関係となつて⁽⁴¹⁾いる。このように事績が知られている室町時代末期の円覚寺関係の禅僧だけ

挿図 5 『忍齋樂水道人口号』
一般財団法人石川武美記念図書館成實堂文庫蔵

でも、夢窓派や幻住派の混在が確認できる。以下、資料を紹介しつつ、その内容を確認していきたい。⁽⁴²⁾ なお、便宜上、番号を附している。まずは、雪村が入寺した正宗寺と交流を持っていたことを証明する三点の記事を見ておこう。

〔史料二〕

和正宗寺住持寄足利講堂翁之詩 時丁年頭此詩序在末

以詩到祝寫鴉青、得一清者得一寧、遙念膏車三四歲、東遊試築洗心經

〔史料三〕

寄佐竹正宗寺 此序之詩在前洗口經韵是也

以經字為韵有陽唱隴和、正宗主翁日新講師是也、其間觀詩筒往來者忍齋老衲是也、殘生黃髮風流事耳冷、生緑苔于陶弼而經寒菜炉之新活計而已、習氣雖除誤欲言詩、况日新師亦非新識正宗翁亦同宗派、於是不可測默也、忍齋欲搜佐竹村松之名区者年久矣、雖然近歲青海動伝箭天山來掛弓、是以川鯉渚鴻之消息、一歲或一回、或兩回、終慰鶴望、古人云、百書不如一見面、信哉此言、正宗翁請識察、予亦同經字韵呈上陳言也、情深可不咲語拙云

〔史料四〕

寄佐竹正宗寺晨初翁

夏丑之初、欲寄一書、而問或人、途程安否如何、含云、連句蚩有蛮蝕之終争、更無豺狼之横路、是以遣使僧於其地、述累日積斲之万一、項者、從湘來者、問予、正宗主盟之瑞世、何月何日哉、翁蚩有君子謙々、預知

其所志、虚空之口須弥之舌、不可藏之、況五峯終懸一笑々々之雖保、来施嵐徳風之時節、瑞世之轍、不可諉々拙語督之、正覺門未、不書言云、个々相期鈞語加、玄猷門下一袈裟、君知出世好時節、深日菖蒲五月花

〔史料二〕は、景初が常陸国の正宗寺の住持とともに、足利学校に立ち寄

り、漢詩を詠んだ記述である。〔史料三〕と〔史料四〕は景初が、正宗寺二十一世の晨初周瞳を訪ねた話である。晨初は、佐竹氏第十五代当主であった義舜（一四七〇―一五一七）の子である。弘治二年（一五六〇）に示寂した⁽⁴³⁾。雪村と同時期に活動していた禅僧である。年代は記載されていなかったものの、これらの史料の前後の記事に、天文五年（一五三六）の年記が多いことから、天文年間（一五三一―一五五）の早い時期の記事と考えられる。この時期の雪村は、正宗寺にいた頃と推測される。従来、景初との交流は、天文二十四年（一五五五）の年記を持つ「叭々鳥図」から、天文年間後半の鎌倉の地と考えられてきたが、天文年間前半に正宗寺で会っていたと推測できる。

〔史料五〕

① 巢雪翁寄一詩、之律甚奇絶、得子夏之目疾以来、詩工夫不浅、雪堂

老所謂惡衣惡食詩愈内、盖為巢雪亦云、阿那律尊者見三千界、如見掌中庵摩羅果、見性不在眼、所虚幾句那律俱具天眼同來韵作詩、自咲某為法之兄月聲、翁為法之弟眼暗

与友交言專有信、億曾相共実青春、他郷停錫世餘歳、不似聖人居似鶻

これは、「巢雪翁」（傍線部①）という人物が景初に詩を寄せた記事である。祥啓の画系として、巢雪僊可という画人が知られている。静嘉堂文庫美術館に所蔵される「巢雪斎図」の書斎名「巢雪斎」が、巢雪僊可を指す指摘があり、本史料に記される「巢雪翁」とは、この巢雪僊可である可能性が高い⁽⁴⁴⁾。かねてより僊可と雪村には共通点が言及されてきた⁽⁴⁵⁾。作品の類似点としては、僊可筆「雪嶺斎図」（五島美術館蔵）（挿図6）の背景に描かれた雪山の描写と、雪村の自画像の背景に描かれた雪山がある。また、雪村が書いた「布袋和尚一行書」と僊可「猿猴図」（五島美術館蔵）の三幅対が伝存していることも理由の一つである⁽⁴⁶⁾。ただし、相澤正彦氏は、この三幅対の寸法が異なっていることから、当初から三幅対ではなかった可能性、僊可の印章が「僊可」と読めないことなどから、僊可と雪村との関係を白紙に戻す必要性を述べている⁽⁴⁷⁾。「史料五」によって間接的ながらも、景初を介した雪村と僊可の

挿図6 僊可筆「雪嶺斎図」
五島美術館蔵

繋がりや推測できることから、今一度、雪村と僊可の関係を見直すことが求められるだろう。

〔史料六〕

大宋識与不識珎大和尚者其惟、普應国師一祖也、昔坐断三千六百丈月山、以為禅床、今派誦四百廿七句楞、以賁梵進、二百年前幻生于癸亥之冬、二百年後再来乎、壬午之秋、聯芳搭主翁唱一篇法曲、謾次高匀云、三世心遠向上禅、相傳千古不傳々、幻華六十一生滅癸亥年号癸亥年
中峯和尚六十一而涅槃二百年忌於華藏寺有之

これは、結城の華藏寺で中峰明本の二百年忌に景初が参加したという記事である。中峰明本の没後二〇〇年となる大永三年（一五二三）の記事と考えられ、景初の動向を知る上で、重要である。先述したように衛藤駿氏は、雪村と祥啓派の接触を鎌倉および北関東の結城と想定する。⁽⁴⁸⁾結城の華藏寺には、祥啓寄寓の跡と称する梅塚がある。また、結城から直線距離にして十数キロしか離れていない佐野で製作された天明釜に、雪村の書が鑄出された作品（根津美術館蔵）も伝存している。⁽⁴⁹⁾そのため、雪村と僊可には関係があり、僊可を含む祥啓派との接触の場所として、結城が想定されている。「史料五」と「史料六」の記事から、雪村、景初周随、僊可らの交流の可能性が想定できるのではないだろうか。加えて、華藏寺は、復庵宗已を開山とする臨濟宗幻住派の寺院であった。⁽⁵⁰⁾仮に雪村が、復庵を慕って遊歴したとすれば、ここを訪れていたとしても不思議はない。

〔史料七〕

那須雲岩寺鐘銘

日本国下野州那須庄東山雲岩禅寺鐘銘、一伝騰首座乘大願輪而鑄之前圓覺周随為之銘（略）
是年天文八巳亥夏四月佛誕生日

この記事は、天文八年（一五三九）四月八日に那須の雲巖寺の鐘銘を景初が手掛けたという話である。この雲巖寺も復庵宗已を開山とする臨濟宗幻住派の寺院であった。後に大蟲宗岑によって関山派（妙心寺派）に替わる。雪村と関係したと推測されている桃林契悟（残夢）が住持した寺院でもある。

〔史料八〕

安雪号

真壁光明請願有少年諱曰心者、寄紙問道号之安雪、二祖恵可立雪而安心
少林大師所印也、（略）天文九年庚子夏五

天文九年（一五四〇）に現在の茨城県桜川市真壁にある光明寺にいた少年に「安雪」という号を付けたとある。『忍斎楽水道人口号』には、多くの寺院の「少年」に与えた道号頌なども認められ、他にも正宗寺の晨初周随の弟子に「通甫」号を与えた記事も見受けられる。雪村の「雪」の字から雪舟を意識していたのではないかという見向きもあるが、この「安雪」の「雪」の字は、達磨の師である慧可がいた少林寺の「立雪亭」を意味している。ことさら「雪」の字を雪舟と関連づける必要はあまりないかもしれない。

〔史料九〕

布袋贊

布袋和尚爪顛之古德也、画師之好所画也、視此図手裏百八摩民軛輾々、蓋看経絡又之形摸也、録云、天上無弥勒人間無釈迦、我則念那个佛乎、矧復世人之所唱長汀于者慈氏之分身百八之摩民者百八之佛弁也、問訊布袋和尚心弁無佛々弁無心其所念如何、寄臂于布囊横脚于拄杖而含歡喜之咲白梅脰皎眉珠重々々、

天文癸丑秋八月彼岸前瑞鹿平等四印道人拜贊

これは、天文二十二年（一五五三）景初が布袋図に贊をした記述である。景初が贊をした雪村筆「叭々鳥図」（文化庁蔵）は、天文二十四年（一五五五）着賛で、この記事と年代が近い。「叭々鳥図」には、「天文乙卯秋九月、四印道人記之」と景初周随の署名があり、この「布袋贊」との共通点が認められる。景初の着賛がある雪村筆「燕図」（禅文化研究所蔵）にも「鹿峯平等、国之四印翁」と署名があり、この「鹿峯平等」は円覚寺方丈平等軒を指すことから、「燕図」が鎌倉で描かれた可能性も指摘されている⁽⁵²⁾。

〔史料十〕

梅隠齋詩并序

天地之間、根莢赴春工之陶冶者、甚多、就中、梅者、出格之尤物、而有百億色香、譬如覆盆麝香、隱之弥彰者也、横一枝于閑散之野、置数珠于寂寞之濱、漏太極春乎歲塞時節、謂之花中巢由况亦梅之寿、配八千歳之大椿、貴介公子、騷人墨客、所珍而重也、而求隠于其樹下、豈非嗜好之迂濶乎、所以者何、人高宗之夢中、則傳説為調鼎塩梅、在楞嚴会裡、則

迦文論甘蔗鳥梅鳴于王宮、称于仏家、隠之為隠、其義如何、^①華藏寺之正老去歳寄一軸曰、予梅隠齋之小画也、題詩序于上、所庶幾也、予謂、山竹者無色、海棠者無香、如此之數、最可卜隠坎、傍有人、責予曰、大隠々市、小隠々山、心若閑、則市中亦不妨、心若忙、則山中亦非隠也、真隠之旨、恰如東方朔避世于朝廷上乎、然則梅猶宜隠、欣然題詩之曰
 今代何人巢海棠、梅花小隠却為妨、春風雉得兔裘地、一点三千世界香
 梅隠齋 雪橋老人為他請

これは、賢江祥啓との関わりが考えられてきた絵師の梅隠齋の記述である。ここに記載される「梅隠齋」とは、雪村と同時期に活動した絵師と目される。細見美術館には、「梅隠」朱文方印が捺された「鴛鴦図」（挿図7）が所蔵されている。中央の鴛鴦は、水気を含んだ柔らかな筆線で描かれ、画面下部の水流はやや硬めの線で表されている。この対比が、画面に抑揚を与えている作品である。この「梅隠」印を持つ絵師の名については、江戸時代の

挿図 7 梅隠筆「鴛鴦図」細見美術館蔵

画譜を見ても混沌としている。『増訂古画備考』の「長柳斎」の項目には、「長柳斎」の落款と「梅隱」の印を持つ作品が掲載されており、「梅隱」印を持つ絵師と可卜と名乗る絵師が同人であると書かれている。⁽⁵³⁾ 栃木県立博物館には、「可卜」印を持つ「懶瓚和尚扇面」が所蔵されており、「可卜」と号した絵師の存在が確認できる。⁽⁵⁴⁾ 『丹青若木集』には、「可卜 棟隠子、建長寺僧、啓書記法眷後住常州水戸」とあり、仲安真康の弟子と書かれている。⁽⁵⁵⁾ ただし、彼らは、その異なる様式から同一人物とは認められない。⁽⁵⁶⁾ このように「梅隱」印を持つ絵師をめぐっては入り組んでいるが、とりあえず「史料十」の記述から、結城の華藏寺の「正老」が持参した梅隱斎と名乗る絵師の「小画」(傍線部①)に景初が賛をしたことは理解できる。このことから、梅隱斎と雪村の関連についても、作品比較を含めて議論を進めるべきだろう。ただし、先述の「鴛鴦図」に見られるようなモチーフを画面全体にちりばめつつ、異なる筆法で画面に抑揚を持たせようとする梅隱に対し、雪村は余白を活かし、画面を鮮明に見せようとする。そのため、構図や描法から共通性を探ることは難しい。

ここまでの記述をまとめておきたい。本史料からは、これまで断片的に推測されてきた雪村の足跡を景初の活動から結び付けられる。雪村と景初周随との関わりは、従来考えられてきた鎌倉の地ではなく、雪村が入寺した常陸国正宗寺からあったと解釈できるだろう。景初は、那須の雲巖寺、結城の華藏寺などの復庵が開山した臨濟宗幻住派の寺院も訪れていたことが確認でき、華藏寺では幻住派の祖である中峰明本の頂相にも賛をしていた。夢窓派である景初は、他の五山派の禅僧と同様に幻住派としても活動していたのかもしれない。そのため、雪村と幻住派の橋渡しのような役割をしていたとも予想される。加えて、本史料からは、巢雪僊可や梅隱といった絵師との関係

についても、景初周随を介した交流を考えることもできるだろう。小川知二氏は雪村が鎌倉や小田原を訪れた背景として、復庵への思いとともに祥啓への憧れがあったのではないかと説いている。⁽⁵⁷⁾ 先述したように、復庵が開いた結城の華藏寺には、祥啓寄寓の跡とする梅塚の伝承がある。復庵と祥啓がいた場所は重複し、本史料からは、これまでの雪村研究で指摘されてきた「点と点」が景初を介して浮かび上がってくる。

三 大蟲宗岑と相鑑斎

次に、法雲寺所縁の禅僧の記録から雪村の伝歴を考えてみたい。雪村と同時期に活躍した禅僧で幻住派と深い関わりがある大蟲宗岑という人物がいる。⁽⁵⁸⁾ 大蟲は、臨濟宗関山派の人で、常陸国小田家の領内で生まれ、法雲寺の塔頭巢月院に入る。天文十年(一五四二)には相州の本光寺にいて、雪村の作品に賛をした大室宗碩を訪ねる。天文十四年(一五四五)駿河の清見寺に月航玄津を訪ねる。永禄三年(一五六〇)下総大竜寺に住持する。永禄六年(一五六三)に常陸小田巢月院に住し、本寺の法雲寺にて行われた普覚国師忌(中峰明本)にて、一偈する。同七年(一五六四)に岩城、同十年(一五六七)に会津の興徳寺に住し、元龜二年(一五七二)まで在住。同年常陸に戻る。天正七年(一五七九)に那須の雲巖寺に住し、これを再興する。天正十六年(一五八八)に「小田氏治像」(法雲寺蔵)に着賛する。大蟲は、関東から東北の寺院を回り、幻住派などの寺院の多くを関山派、つまりは妙心寺派に変えさせており、この時代の関東圏の禅宗の展開を考える上で、重要な存在である。⁽⁵⁹⁾ 加えて、雪村が関係した寺院とされる興徳寺に住持している。次に紹介する大蟲宗岑の語録『大蟲岑和尚語録』(以下、『語録』)には、雪村の活動の年代と場所が一致する記述がある。

なお、『語録』の引用に際し、『牛久市史 中世 記録編』を参考にしつつ、東京大学史料編纂所の謄写本を底本として翻刻した⁽⁶⁰⁾。使用されている字は出来得る限りこれに準じたが、難解な異体字等は適宜訂正を施している。

〔史料十一〕

凡諸芸之中、尤可勤者絵事也、故支竺日本、上從王侯、下至儒積、^①道以遊画為第一、唐宇之滕王、宋朝之徽宗、積有牧溪雪窓、儒有文与可蘓軾、其餘碌々、不堪枚挙焉、^②吾聞語於画師、画山則廬岳三百六十招提、嵩山卅六仙洞、巫岫之雲雨、峨眉之秋月、遊其心於塵外矣、写水則淮南之二十四、西湖六橋、湘浦之八景、海外之十州、擬其心於清白矣、画雪月花、則紅綠其情、潔白其志矣、^③描仏祖、則空寂其心、直指其性矣、凶聖賢、則通達其心、澹泊其臍矣、軍士之殺氣也、武勇也、仙道之幽栖也、閑味也、樵夫之徑余屋、漁翁ノへ片帆、富士之雪、淺間之烟、明石朝露、難波之夕霞、丹青未下、先寒灰其心、枯淡其懷矣、加之飛禽猛獸、意氣威獐、画其形則通其心、察其趣、於爰一々從筆下幼出者、画口之精妙巴云々、誠哉斯言、天地同根、万物一躰、其於画工道之乎、城府之^④相鑑齋老人、^⑤常陽之英産、而從丁卯歲、以絵事高其名、忝予同邦同其郷、實他郷之旧相識也、一日扣旅櫺、清話之次、被惠一軸、披之則出山甘蔗、度江老胡、其威烈迫真、使人毛骨寒、一座驚嘆田、拍雪窓肩、挹趙昌袂也、太奇々々、々先所論未為至論、熟視老人墨跡、則八万丈天台、千百億之須弥、丈山尺拊、寸馬豆人、尽從老人、自己胸襟流出、伝之千万世、豈非無価至宝乎、雖然恁广約祖宗門下、則乾坤未判、万象未現、到這裡向何処下一点、此即描不成、画不成是什麼境界、諸老人枕筆奴、而就明窓下、默坐子細看、仍述二絶、嘆美其方云、

此老胸中点不埃、驚人妙画是天才、毫端吐出即心仏、碧眼黄頭叫再来
淡墨郭熙花趙昌、画工妙意有推量、老人手裡藏天下、片紙写来支竺桑

冒頭の「道以遊画為第一」（傍線部①）に見られる「遊画」とは、仏教用語である「遊戯三昧」を意味するものと思われる。『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一年）によれば「遊戯」とは「もはや道を修する要もなく、道と共にあつて道そのものを自在に楽しむ境地」とある⁽⁶¹⁾。横田忠司氏は、室町時代の画僧の制作態度を示す言葉として「遊戯三昧」を挙げており、「遊画」とは道そのものを自在に楽しむ境地で制作された絵画を指すものと理解できる。この記述の後には、名山や中国の景勝地などを制作する際の精神性について述べている。廬山や嵩山、巫山、峨眉山は、中国で名高い霊山として知られている。これらの山や寺院や仙洞、雲雨、秋月を描くことは隠逸の思想の現れと考えられよう。淮南や瀟瀟八景や西湖などの「水」の表現は、「清白」な「心」を表し、単なる名所の画題ではなく、描く行為から生じる心性が込められている。仏祖を描くことは、心中に何も考えがない時に、その仏祖の精神性が描く指に宿り、聖賢を描くことは、物事を良く知っているという知識の現れと語られている。

重要な点は、「相鑑齋」（傍線部④）という絵師の具体的な名前が出てくることである。相鑑齋は、江戸時代の画史画伝にその名前が登場するだけで、実際の作品もなく、存在自体も確認されていなかった人物である。江戸時代の画譜を見ると、「宦南」という印字が捺されていると書かれている。『古画備考』には「相鑑」と読める印が掲載されており、相鑑と名乗る絵師の作品が幕末まであったことをうかがわせる⁽⁶²⁾。また、『増訂古画備考』の「金玉僊」の項目には、宦南という号を持つ人物が掲載されており、彼は「常陽」

挿図 8 宦南筆「飲中八仙・西園雅集図屏風」上：右隻、下：左隻 茨城・正宗寺藏

と読める印を用いていたこともわかる。⁽⁶⁴⁾ 画譜の共通点などから、大石利雄氏は、相鑑斎と宦南の同人説を提唱されている。⁽⁶⁵⁾ 雪村が若い頃にいた正宗寺に宦南筆「飲中八仙・西園雅集図屏風」(挿図8)が所蔵されていることから、雪村と宦南が何らかの関係を持っていたと指摘する。また、本屏風の土坡や人物の像容などには祥啓の描法が見られることから、祥啓派の流れを汲む画人とされた。⁽⁶⁶⁾ 小川氏は、『増訂古画備考』所収の「宦南印 梅二鶯」の作品に「常陽」の陽刻瓢印が掲載されていることから、宦南が常陽と関連し、この屏風は当初から正宗寺に所蔵されていた可能性を述べている。⁽⁶⁷⁾

ここで、もう一度『語録』に立ち返りたい。相鑑斎は、「常陽之英産」(傍線部⑤)の生まれであった。ただ「予同邦同其郷」の記述が、大蟲の故郷とされる常陸国の小田氏の支配領域を指しているのかは解釈が難しい。とりあえず、相鑑斎と名乗る絵師が常陽の生まれであり、永禄十年(一五六七)頃に、絵事で高名になったと理解できる。大蟲は、相鑑斎が描いた「出山釈迦」や「渡海達磨」の絵を見たと言っている。この史料からは、相鑑斎が手掛けていた画題についても判明する。

永禄十年は、赤澤説では雪村六十七歳にあたり、小川氏の研究によれば、雪村が三春と会津を行き来していた七十代後半の時期にあたる。⁽⁶⁸⁾ 彼らの活動場所が重なることから、雪村は、興徳寺において相鑑斎や大蟲と交流していたのではないだろうか。しかも、『新編会津風土記』には、大蟲が住した興徳寺に、雪村の布袋図の所蔵が記されており、大蟲と雪村が何らかの接点を持っていたことが現実味を帯びる。相鑑斎と宦南が同一人物と仮定するならば、相鑑斎と雪村の繋がりも、正宗寺という常陸の寺院で結び付く。彼らの足跡を、大蟲宗岑という線で繋げることができるのである。

加えて、『語録』絵の精神性を絵師自身が語っている点も画僧たちの作為

を示す例として重要であろう。「吾聞語於画師」(傍線部②)の記述から、大蟲は、相鑑斎から絵の精神性について話を聞いていたことが理解できる。雪村が彼らと交流していた可能性が高いことから、雪村画についてもそのような精神性を読み取ることができるかもしれない。

横田忠司氏は、画僧の制作態度について、「修禪の余暇に心を絵事に遊ばせる」ということを採っていたと考察する。⁽⁶⁹⁾ 『語録』には、仏祖を描くことは心を「空寂」にし自らの指に宿る、あるいは聖賢を描くことは聖賢の心に達し、体の内側に宿ると記述されている(傍線部③)。つまり、絵師の制作態度や意識ではなく、描く行為によって生じた心理的作用が強調されているのである。むろん、その言葉の裏には、制作や鑑賞の態度の意味を込めたと考えられるが、室町時代の画僧の修禪を示す一例として極めて貴重であろう。寒山・捨得のような聖賢に、源豊宗氏は、「世間の物欲を放下した枯淡な生の中に、自在を得る禪的生活理念が象徴されている」とされた。⁽⁷⁰⁾ この理念が絵画のどこに表象されているのかと問われれば、答えることは非常に難しい。近年、禅と美術の関係性を見直す論考も報告されており、『語録』は、絵画における禅の精神を捉え直す糸口を与えてくれる。⁽⁷¹⁾

おわりに

本稿は、これまで断片的であった雪村の伝歴について、景初周随と大蟲宗岑という二人の禅僧の史料を使って、線を繋ぐべく考察を試みた。景初周随との交流は、従来考えられてきた鎌倉の地ではなく、すでに雪村が若い頃の常陸時代から始まっていたことを述べた。また、大蟲宗岑という禅僧との交流の可能性を述べ、彼の語録から相鑑斎という絵師が存在していたことを紹介し、同じ正宗寺に所蔵されている宦南(相鑑斎)との関係性についても、

大蟲の記録から、その交わりの可能性を指摘した。従来の雪村研究では、雪村の伝歴は「点」で捉えられ、それらを線で繋ぐことは困難であった。二人の禅僧の記録からは、梅隠齋、僊可、相鑑齋といった絵師との交流を推測でき、彼らを結び付けたのは、臨済宗幻住派のネットワークと考えられたのである。

雪村が憧れたとされる復庵宗己は、鎌倉や京都の五山とは距離をおき、林下として地方の禅宗の中で大きな役割を果たした。⁽⁷²⁾ 復庵の下には、月菴宗光(二三六―八九)や白崖宝生(三三四―一四一四)のように「遍参遊方」と称して、歴参するものが多かった。雪村は、常陸や会津、小田原、鎌倉で画業を積み、個性的な作品を描いてきた。雪村は、「遍参遊方」のような幻住派という林下の禅僧として各地にいる知識ある禅僧と会うことを求めて、諸国を遊歴したのではないだろうか。フォード氏が指摘するように、「自画像」には幻住派の影響が認められる。今後は、「自画像」以外の個性的な作品からも幻住派との関連を追究することが求められるだろう。

本稿は、雪村と臨済宗幻住派の関係について、作品や思想面ではなく、人的ネットワークから捉え直すことに終始した。史料の紹介に紙面の大分を割いたため、深遠な臨済宗の表面をなぞっただけに過ぎないが、雪村研究の見直しの一助となれば幸いである。

註

- (1) 橋本慎司「雪村画系の画人たち」『関東水墨画―型とイメージの系譜』国書刊行会、二〇〇七年、一〇二―一六頁。
- (2) 衛藤駿「雪村―東国の画人―」『雪村―常陸からの出発―』展図録、茨城県立歴史館、一九九二年、一〇頁。
- (3) 成瀬不二雄「雪村周継の画論『説門弟資云』についての疑い」『美術史論集』一、

二〇〇一年。小川知二「雪村の画論『説門弟資云』について」『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』五五、二〇〇四年(同氏「常陸時代の雪村」中央公論美術出版、二〇〇四年に所収)。

(4) 『本朝画史』を著した狩野永納は、水戸徳川家と密接な関係にあった。永納は、徳川光圀によって開始された大日本史の編纂に関わっていたのである。五十嵐公一氏は、この関与から『本朝画史』の編纂に大日本史の影響があった可能性を指摘している(五十嵐公一「狩野永納の周辺から」『塵界』一〇、一九九八年、八七―九二頁)。現在、雪村の生誕地は、常陸国で確定している。『本朝画史』の雪村生誕地を常陸とする記述は、水戸徳川家が雪村の地元で得た何らかの情報を基に書かれたことを推測させる。

(5) 福井利吉郎「雪村新論」『岩波講座日本文学』第二〇回配本、一九三三年、四一頁(同氏「福井利吉郎美術史論集 中」中央公論美術出版、一九九九年に所収)。

(6) バーバラ・B・フォード「雪村周継の画像」『天和文華』七四、一九八五年。

(7) 山田烈「上野・下野における雪村の足跡」『雪村―奇想の誕生』展図録、東京藝術大学美術館、二〇一七年、七七頁。

(8) 前掲註5福井氏論考。赤澤英二「雪村研究」中央公論美術出版、二〇〇三年、七五―一〇頁。小川知二「常陸の雪村」『常陸時代の雪村』中央公論美術出版、二〇〇四年、四七頁。

(9) 小川知二「雪村の生涯と作品の編年」『常陸時代の雪村』中央公論美術出版、二〇〇四年、八九―一九頁。

(10) 正宗寺の歴史については、以下の文献を参照。『正宗寺』正宗寺文化財保存協会、一九八三年。

(11) 赤澤英二「正宗寺藏の雪村筆瀧見観音圖―雪村と佐竹氏の問題に關連して」『国华』一〇八二、一九八五年(前掲註8に所収)。

(12) 前掲註8、赤澤氏書、二六頁。

(13) 坂崎担編『日本絵画論大系II』名著普及会、一九八〇年、三四二頁。

(14) 花見朔巳校訂『新編会津風土記』第一巻、雄山閣、一九七七年、二九二頁。註8 赤澤氏書、二六頁。

(15) 前掲註14『新編会津風土記』、一八八頁。

(16) 坂崎担編『日本絵画論大系III』名著普及会、一九八〇年、一二五頁。

(17) 玉村竹二「幻住派の導入と法系の大変動」『圓覚寺史』春秋社、一九六四年、二九〇頁。

(18) 山田烈「古河公方と室町水墨画」『日本美術襍稿―佐々木剛三先生古稀記念論文

- 集』明德出版社、一九九八年、三二〇―三二一頁。同氏「雪村筆孔子觀歎器図小考」『東北芸術工科大学紀要』一五、二〇〇八年。
- (19) 川本慎自「中世後期関東における儒学学習と禅宗」『禅学研究』八五、二〇〇七年。同氏「室町時代の鎌倉禅林」『東アジアのなかの建長寺―宗教・政治・文化が交差する禅の聖地』勉誠出版、二〇一四年、三〇〇頁。
- (20) この議論については、次の文献を参照。松谷美美「雪村周継の生涯と作品(二)小田原・鎌倉滞在期「瀟湘八景図巻」を中心に」『慶應義塾大学アート・センター年報／研究紀要』二五、二〇一八年、一五〇頁。
- (21) 『大日本史料 第十編之二十六』東京大学出版会、二〇〇九年、五〇五―五〇八頁。
- (22) 前掲註3、小川氏書。七一頁。月航の記録については、次の史料を参照した。『月航和尚語録』(東京大学史料編纂所謄写本)。
- (23) 玉村竹二「臨済宗幻住派」『日本禅宗史論集 下之二』思文閣出版、一九七九年。
- (24) 伊藤幸司「博多聖福寺と臨済宗幻住派」『日本最初の禅寺―博多聖福寺』展図録、福岡市博物館、二〇一三年。
- (25) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成(新装版)』思文閣出版、二〇〇三年、五六八―五七一頁。
- (26) 前掲註6。
- (27) 井手誠之輔「中峰明本自賛像をめぐる」『美術研究』三四三、一九八九年、一〇五頁。
- (28) 前掲註6、三五頁。張玄の羅漢図については、以下の論考を参照。宮崎法子「宋代佛畫史に於ける清涼寺十六羅漢像の位置」『東方學報』五八、一九八六年、二一三―二一四頁。
- (29) Helmut Brinker, *Chan Portraits in a Landscape, Archives of Asian Art*, 27, 1973-74, pp.13-15.
- (30) 赤澤英二「三春の雪村と田村氏」『国華』一二四二、一九九九年、二六頁(前掲註8に所収)。
- (31) 前掲註8、赤澤氏書、二五頁。前掲註3、小川氏書、九四頁。
- (32) 玉村竹二「幻住派の導入と法系の大変動」『圓覚寺史』春秋社、一九六四年、二九〇頁。
- (33) 伊藤幸司「中世日本の外交と禅宗」吉川弘文館、二〇〇二年、二九五頁。
- (34) 玉村竹二「日本中世禅林に於ける臨済・曹洞兩宗の異同―「林下」の問題について」『日本禅宗史論集 下之二』思文閣出版、一九七九年、一〇三四頁。
- (35) 前掲註34、一〇〇三頁。
- (36) 『戦国武将小田氏と法雲寺』展図録、土浦市立博物館、二〇一一年。なお、この文と同じものが、次に採り上げる『忍斎楽水道口号』にも掲載されている。
- (37) 景初周隨の円覚寺在任期間は、天文元年(一五三二)から同五年(一五三六)と見られる。また、円覚寺の歴代住持の数え方は、資料によって異同があるが、本稿では玉村竹二『圓覚寺史』(春秋社、一九六四年、七七九頁)を参照した。
- (38) 山田烈「雪村筆吹々鳥図の制作背景」『東北芸術工科大学紀要』一二、二〇〇五年、六五頁。
- (39) 川瀬一馬編『お茶の水図書館蔵新修成實堂文庫善本書目』石川文化事業財団お茶の水図書館、一九九二年、三〇七頁。本書は、川瀬一馬氏が「関東諸禅僧の往来を記すこと多し。」と評するように、室町時代末期の禅僧の動向を知る重要な史料と言える。現在のところ、本書に注目された研究はなく、今後の詳細な研究が待たれる。
- (40) 前掲註32、二九五頁。
- (41) 前掲註32、二九四頁。玉村竹二『五山禅林宗派図』思文閣出版、一九八五年、二〇〇頁。雲如については、次の史料を参照。自筆本『雲如和尚文稿』一般財団法人石川武美記念図書館成實堂文庫蔵。
- (42) 景初周隨の足跡については、これまで殆ど判明していないが、本史料から動向を知ることができる。また、本史料には、正木美術館が所蔵する「景初周隨墨蹟 江湖疏」の本文も掲載されている。この墨蹟は、永正十七年(一五二〇)に書かれたもので、円覚寺一五〇世の叔悦禅樺の餞別の一軸である。次の文献を参照されたい。『墨の彩―大阪・正木美術館三十年』展図録、根津美術館、一九九八年、一五七頁。
- (43) 前掲註10、一一七頁。
- (44) 相澤正彦「祥啓様式の型5―書斎図」『関東水墨画―型とイメージの系譜』国書刊行会、二〇〇七年、一四六―一四七頁。
- (45) 衛藤駿「相阿弥／祥啓」(日本美術絵画全集六) 集英社、一九七九年、一一九頁。
- (46) 前掲註18、山田氏論考「古河公方と室町水墨画」、三〇七―三〇八頁。
- (47) 相澤正彦「祥啓とその時代」『関東水墨画―型とイメージの系譜』国書刊行会、二〇〇七年、七一頁。
- (48) 衛藤駿「雪村筆吹々鳥圖」『国華』一〇〇五、一九七七年、三二頁。
- (49) 小山由貴子「作品解説 古天明十王口釜」『雪村―奇想の誕生』展図録、東京藝術大学美術館、二〇一七年、二一〇頁。
- (50) 広瀬良弘「下総結城地方における禅宗の展開」『禅宗地方展開史の研究』吉川弘

- 文館、一九八八年、三三〇—三三二頁。
- (51) 前掲註3、小川氏書、六六頁。
- (52) 梅沢恵「円覚寺の宝物をめぐる伝承とイメージの形成—仏牙舍利・五百羅漢・観音菩薩—」『鎌倉禅林の美 円覚寺の至宝』展図録、三井記念美術館、二〇一九年、四八頁。
- (53) 朝岡興禎、太田謹編『増訂古畫備考』思文閣出版、一九七〇年、八〇八頁。相澤正彦・橋本慎司「祥啓の画系」『関東水墨画—型とイメージの系譜』国書刊行会、二〇〇七年、七三頁。
- (54) 根津美術館の本田諭氏のご教示による。
- (55) 江戸時代の画譜類に、「常州水戸」に住したとする記事は見逃せない。言うまでもなく、雪村の出身地である常州と関係するからである。そのため、「可卜」印を持つ作品と雪村画を比較する必要もあるだろう。前掲註13、三六二頁。
- (56) 相澤正彦・橋本慎司「跋陀婆羅・懶瓚・六祖慧能」『関東水墨画—型とイメージの系譜』国書刊行会、二〇〇七年、二五二頁。
- (57) 前掲註3、小川氏書、七五頁。
- (58) 松田奉行「大蟲宗岑禅師讚仰」『禅学研究』三七、一九四二年。前掲註25、四二五—四二六頁。清宮良造『大虫和尚一代記—戦国時代の禅僧』大虫和尚顕彰会、一九九五年。
- (59) 室町時代後期の関山派の動向については、以下の文献を参照。前掲註34、一〇三—一〇四頁。
- (60) 『平久市史 中世 記録編』牛久市史編さん委員会、一九九四年、三二—四頁。
- (61) 入矢義高監修・古賀英彦編著『禅語辞典』思文閣出版、一九九一年、四五—八頁。
- (62) 横田忠司「室町水墨画における画僧の制作意識について—とくに愚溪右慧のそれを中心に—」『多摩美術大学研究紀要』二、一九八五年、七—四頁。
- (63) 前掲註53『増訂古畫備考』六六—二頁。
- (64) 前掲註53『増訂古畫備考』一七—三七頁。
- (65) 大石利雄「宦南について—正宗寺藏「飲中八仙・西園雅集圖屏風」を中心に—」『国華』一一三—五、一九九八年。
- (66) 前掲註65、三二頁。
- (67) 前掲註3、小川氏書、七二頁。
- (68) 前掲註3、小川氏書、九四頁。
- (69) 横田忠司「室町水墨画における画僧について—その性格と役割—」『宗教美術研究』一、一九九四年、八一頁。
- (70) 源豊宗「禅宗美術としての墨蹟と絵画」『禅と芸術Ⅱ』ぺりかん社、一九九七年、二一—八頁。
- (71) 島尾新「絵画から見た禅」『禅からみた日本中世の文化と社会』ぺりかん社、二〇一六年、一〇—一六頁。
- (72) 前掲註34、一〇〇二—一〇〇三頁。
- 〔附記〕
本稿は、二〇一八年十月二十六日に東京文化財研究所でおこなわれた第五十二回オーブンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」で発表した「雪村周継と臨済宗幻住派—大雄山法雲寺を起点に—」をもとに、その後の知見を交えてまとめたものです。発表の準備段階から栃木県立美術館の橋本慎司先生には、懇切なご指導をいただきました。発表終了後には、河合正朝先生、山田烈先生、古田亮先生からも貴重なご意見を賜りました。また、史料の翻刻に際し、一般財団法人石川武美記念図書館の佐藤祐一様からご高配いただきました。末尾ながらお礼申し上げます。
- 〔挿図出典〕
挿図1 筆者作成
挿図2 『戦国武将小田氏と法雲寺』展図録、土浦市立博物館、二〇一一年
挿図3・4 『雪村—奇想の誕生』展図録、東京藝術大学美術館、二〇一七年
挿図5 一般財団法人石川武美記念図書館成篁堂文庫提供
挿図6・7 『関東水墨画—型とイメージの系譜』国書刊行会、二〇〇七年
挿図8 『関東水墨画の200年—中世にみる型とイメージの系譜』展図録、神奈川県立歴史博物館、一九九三年

図版要項

一 雪村周継筆 自画像(カラー)

紙本墨画淡彩 一幅 縦六五・二cm 横二二・二cm 奈良 大和文華館蔵
同館画像提供

一 水野裕史「雪村周継と臨済宗幻住派」参照

図版はオフセット印刷